

獣 医 学 の 発 展 の た め に

久和 茂[†] (公社)日本獣医学会代表理事・東京大学大学院
農学生命科学研究科教授)



公益社団法人 日本獣医学会
2017～2018年度(第103回)定
時総会直後に開催された第2回理
事会(平成29年9月14日)に
おいて代表理事に選任され、2年
間の舵取りを任された。身の引き
締まる思いである。私は中山前理
事長の下で3期、庶務担当理事と

して学会運営に協力してきた。これまでの経験を活かし、微力だが、日本獣医学会の発展に全力を尽くしたいと思う。日本獣医師会会員の皆様方にもご理解・ご協力を切にお願い申し上げます。この度、日本獣医師会雑誌編集委員会より紙幅をいただいたので、今後の方針などを含めて私見を述べたい。

1 継 続 課 題

中山前理事長が掲げられた3つの重点事項、すなわち、①「獣医学教育充実の支援」、②「国際化の促進」、及び③「男女共同参画の推進」については、継続して注力していくつもりである。特に現在は、日本の「獣医学教育」にとって非常に重要な時期に当たっていると感じている。つまり、わが国の獣医学教育改革に関するここ数年間の動きが、将来のわが国の獣医学を決定づけるような意味合いを持つだろうと考えている。日本獣医学会は獣医学教育改革の中心的組織ではないが、獣医学教育を担う大学教員は日本獣医学会の主要な構成員である。獣医学教育関係者の力を結集し、行政や関係諸団体と協力し、将来の日本国民の幸福に資するような獣医学教育体制の構築に貢献できればと考えている。もちろんこのような大事は個人の力でできる訳はなく、皆様方のご理解・ご協力がなければ実現できない。男女別なく、また日本国内だけを見ては適切な獣医学教育改革はできず、上記の3つの重点事項は相互に関係しているともいえる。

2 獣医学教育体制

昨年、半世紀ぶりにわが国に新たな獣医学部が設置されること擦った揉んだの末、決まった。いろいろな意

見があることは承知しているが、「動き」があること自体は悪いことではないと思う。ただし、その「動き」の善悪が衆目を集めることは確実であろう。

その昔、国立大学の構造改革を示した文部科学省の「遠山プラン」というものがあった。その柱は、①国立大学の再編・統合を大胆に進める、②国立大学に民間的発想の経営手法を導入する、③大学に第三者評価による競争原理を導入する、というものであった。それから20年近く経ち、すでに国立大学は法人化され、また大学等では「……に関する評価」が数多く実施され、「評価疲れ」もみられる現状であるが、一部の大学の再編・統合は行われたが、「大胆に」という表現が相応しい状況には至っていないと思う。現在、国立大学法人の一部の獣医系大学では、「共同獣医学部」、「共同獣医学課程」及び「共同獣医学科」が設置され、教育が進められているが、これらが今後どのような転機を迎えるのか、非常に重大な課題であると考えている。

3 獣医学研究と日本獣医師会との連携・協力

近年、新興・再興感染症の発生や薬剤耐性菌の拡大など、地球規模での取り組みが必要な課題が多く発生し、社会問題となっている。このような課題に適切に対応していくためには学問領域を越えた協力体制による新たな知見の創出と人材の育成がますます重要になる。人間の健康を守る上で獣医学が必須の学問の1つであることをもう一度社会に訴えていくとともに獣医学をさらに発展させるべく研究・教育の推進及び普及に全力で取り組んでいかなければならない。そのような観点でみると、一昨年北九州市で開催された「第2回 世界獣医師会-世界獣医師会“One Health”に関する国際会議」及びその会議で採択された「福岡宣言」は非常に意義深いものであったと思う。獣医学教育の体制整備は重要であるが、社会から要請のある研究も継続・発展させていかなければならない。そして、獣医学領域のプレゼンスを今後も社会に示していく必要がある。

日本獣医学会は毎年、日本獣医師会獣医学術学会において2つのプログラムを共同企画させていただいている

[†] 連絡責任者：久和 茂(東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻実験動物学教室)

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 獣医学専攻実験動物学教室 ☎03-5841-5038 FAX 03-5841-8186

E-mail : akyuwa@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

が、日本獣医師会とともに日本の獣医学、さらに世界の獣医学を発展させるべく協力関係の前進に努力していきたいと思う。

4 日本の獣医学から世界の獣医学へ

中山前理事長の重点事項の1つに「国際化の促進」が掲げられていた。それで、中山理事長在任中に日本獣医学会内に「国際交流委員会」が設置された。また、本年11月に日本獣医学会主催の国際会議“International Conference on Veterinary Eligibility and Education”の開催を予定している。わが国においては獣医系大学を卒業し、「獣医師国家試験」に合格することが獣医師となるには必要だが、必ずしもそれが世界の共通ルールではない。大学においてどのような教育を行い、どのような過程を経て、「獣医師」が誕生するのか、世界の状況を今一度確認したいと考えている。今般進められている獣医学教育改革も「世界水準」の獣医学教育を目標として体制整備することをめざしているし、昨年日本学会議から発せられた提言「わが国の獣医学教育の現状と国際的通用性」においても「(前略)……多様な社会的ニーズに対応できる国際的レベルの獣医学教育体制を早急に整える必要がある。」と述べられている。日本国内のニーズ、アジアのニーズ、さらに世界のニーズを分析し、それらに対応できる獣医師を世に送り出すことが、われわれに求められていることではないだろうか。

世界各国に獣医師集団の組織(〇〇獣医師会)は存在しているが、獣医学の学術普及に特化したわが国の「獣

医学会」に相当する学会がある国は少ない。東アジアの韓国や台湾には「獣医学会」が存在する。最近、韓国獣医学会よりそれらの獣医学会で学術交流を活発に行わないかという提案をいただいた。よい機会であると思うので、前向きに検討したいと思っている。

5 最後 に

獣医師は動物の「生」にかかわるだけでなく、その「死」にもかかわらざるを得ない職業だと思っている。獣医師を養成する獣医学教育において、どのように動物に接するかは重要な点である。昨今、わが国の獣医学教育における動物の扱い方が諸外国の獣医学教育とは異なるのではないかという意見を国内外からいただいている。獣医学教育モデル・コア・カリキュラムの中で「獣医倫理・動物福祉学」という科目が設定され、すべての獣医系大学において授業が行われ、学生は人と動物の関係性を見つめなおすことが求められる。従来、わが国の獣医学教育においてはこのような視点が十分ではなかったかもしれない。ただ、欧米と日本では「動物観」も社会状況も異なる。今後もしろいろな視点からの議論を重ねていかなければならないだろう。したがって、この問題が集約するには少し時間を要するものと推測する。

若干とりとめのない文章になってしまったことをお詫びする。ここに記載した内容はあくまで私見であり、日本獣医学会の意見ではない。関係の皆様との議論の題材となれば、幸いである。